

< これからの明舞団地を考える >

明舞まちづくりワークショップ等報告会 記録



月 日 : 2004年3月27日(土)

場 所 : 明舞センター松が丘ビル

3階大会議室

< これからの明舞団地を考える >

明舞まちづくりワークショップ等報告会 記録

日 時：2004年3月27日(土) 13:30～16:08

場 所：明舞センター松が丘ビル3階大会議室

参加者：地域住民30名(神戸市/19名、明石市/11名)、商店2名、NPO6名
学生2名、他行政3名、スタッフ12名(兵庫県6名、公社1名含む)

本日の司会進行は、兵庫県県土整備部まちづくり局住宅地課の菅雄二氏が務めた。

開会挨拶(高田弘志氏:兵庫県県土整備部まちづくり局住宅地課長)

本日はお休みのところ、当報告会にご参加いただきありがとうございます。

皆さんご承知の通り、この団地も街開きから40周年になります。人でも40年経ちますと随分変わります。この団地もできた頃は、時代の最先端をいく計画に基づいてつくられたのですが、変わっていくのは避けられません。皆そうなのですが、私も元気でありたいと思うように、やはりまちも元気であり続けてほしいと思います。そのためにどうするかということで、平成13年から団地の活性化につながるようにと取り組みを始めました。今年度は、ワークショップを4回やらせていただきましたが、今日はその報告をしていただきます。そして今、私どもで用意させていただいた3つの空き店舗で、自治会やNPOの方々に団地の活性化につながる事業をやっていただいています。また、松が丘校区連合自治会の方々が自主的に、団地の活性化につながるコミュニティマップづくりをされました。そうしたいろいろな報告をしていただいた後、パネルディスカッションをしますが、今後の活性化につながる大きな刺激になればと思っています。



私は本日、団地を少しでも知るために駅から歩いてきました。下の商店街で一番驚いたのは、今日でオープン4日目だということですが、「スーパー新鮮組」に非常に多くの人々が来られていたことでした。裏返しで考えると、住民の方々はこういう仕掛けを待たれているのではないかという気がします。そういう目でこちらのビルの壁面をうまくPRか何かに使えないかと思いながら見ていますと、ボランティア募集の張り紙があり、これも一つの取組として、壁の使い方も内容もいい話だと思いました。いろいろな方々によるいろいろな新しい試みを期待しております。そういうことで、今日の会合を一つの大きなバネにして、これまでやってこられた方々、本日出席されている方々、その他の住民の方々、そして商店街や自治会の方々と一緒に、このまちに活気がどんどん出てくるようになっていくことを期待して、冒頭の挨拶にさせていただきます。

・明舞団地活性化のための活動報告

(1) 明舞まちづくりワークショップについて(辻信一氏:環境緑地設計研究所、神戸まちづくり研究所)

ワークショップとは

いろいろな会議の仕方の仕方がありますが、できるだけ参加者の全員が発言する、あるいは意思決定に関わり合うことができるように工夫してやることをワークショップと言います。具体的には、7～8人の小グループに分かれて、全員が発言して関わるというやり方です。参加者が、お客さんではなく主体的に物事



を進めていくことができるわけです。今日は盛んに、まちづくりという言葉が出てくると思います。その主役である地域住民の皆さん方が、どれだけこのまちづくりに関わることができるのか。計画づくりの段階から、自分たちの意見を反映させていくという手法です。意見を言えば、言葉というものは言ったとたんにとんども消えてしまいます。その意見を小さなカードに書いて、模造紙に貼って分類します。そうすると、グループ内で同じ意見がたくさんあったとか、一人だけ違った意見があったとかがカードに出てきます。これをどうするかということが、ものすごくやりやすい。会場の両側に、2回目の団地の環境をどうするのかという時の模造紙と、最後の住宅をどのようにしていくのかという時の模造紙が貼ってあります。皆さんの意見を、団地再生計画に反映させていくために、このワークショップがありました。

ワークショップの振り返り

1回目は「明舞センターを考える」、2回目が「明舞団地の住環境を考える」、3回目が「明舞団地の未来について考える」、4回目が「住宅の将来像を考える」という流れでした。私たちは4回目の、皆さん方のお住まいをどうしていくのだろうか、どう思われているのだろうかということをお聞きしたかったのですが、突然にお聞きしても大変ですので、徐々に話がしやすいようなステップを踏みながらやっていきました。ご意見は、エエとこ、アカンとこ、それをどうしていくかの3点セットでお聞きしました。

第1回の「明舞センターを考える」のグループワークでは、エエとことして、空間にゆとりがある、施設がまとまって集中している、公園やグランドがある、バスの便がいい、緑が多いというようなご意見がありました。アカンとことして、活気が無いというのが一番多い。それから老朽化している、バリアが高い、駐車場が使いにくく料金が高いという声が出ました。それに対してこうなればいいというものでは、若い人が来るようなものになればいい、もっと人が集まるようにセンター機能を改善する、芸術的なものを置く、集える場所が必要、そしてセンターには買い物という非常に重要な機能がありますが、何でもそろうセンターになってほしい、イベントやお祭りをもっとやれば賑やかになってくるというご意見がありました。明舞センターは、日常的に皆さんがお使いになるわけですから、非常に身近な大事な施設です。それを住民側から意見を出していただき、もっと来ていただけるような形にしていけばお店も良くなっていきます。店側からの考えだけではなく、両側からやっていくような形になれば、将来もっと良くなるのではないかと思います。

2回目の「明舞団地の住環境を考える」では、南の方にお住まいの方とか、北の方にお住まいの方とかでまとまっていただいていくつかのチームでやりました。「明舞・海の手団地チーム」では、神戸と明石の間に連絡橋をつくるとか、いろいろ具体的な意見も含めていただきました。北の方の神陵台の「むくどりチーム」では、この辺は鳥が一杯来るので、野鳥とかピオトープとかでまちの環境を良くしていこうという話がありました。「人づくり環境づくりチーム」では、いい環境をつくっていくためには人づくりが大事で、人と環境が連動していると。物だけ一生懸命物やっても駄目で、人がやっていくのだから、そういうことをやっていこうという話がありました。

3回目の「明舞団地の未来について考える」では、趣向を凝らして、こうなればあなたはどうしますかという未来のシナリオを3つ考えました。まちのシナリオAは「居住者が多様化するまち」、Bが「高齢者に住みよいまち」、Cが「企業が進出してくるまち」の3つで、そうなればあなたはどうしますかということをお聞きしたわけですが、そして、そういうまちには住みたくないからどこか他所へ行きますとか、あるいはそうなるもここで生き続けますとかという選択をしていただき、望ましいまちの未来に到達するために、あなたは何をしますかということをお聞きしました。そういう中で、コミュニティ活動を盛んにするという言葉に代表されますが、人と人とのつながり、コミュニティという言葉がたくさん出てきました。そのことは、実はコミュニティが今かなり難しいのではないかと、皆さんの危機感の表れなのではないかと思えます。

最後の4回目の「住宅の将来像を考える」ですが、この地域にはいろいろな住宅種別があります。集合住宅と戸建住宅とに大きく分かれていますが、集合住宅でも公社分譲や県の賃貸、それから公団の賃貸もあります。そういういろいろなお住まいの仕方ごとに、将来どんなことをやっていくべきなのかなということを考えていただきました。1 グループの「公営賃貸住宅」では、住民の意見がなかなか通らないという問題があります。具体的には、サッシや襖は傷みがひどい、構造的な耐震性の問題やペットの問題、防音・防寒・給湯設備のようなところでいろいろ問題があるというご指摘がありました。それには、話し合いながら自分たちの手で取り組んでいきたいというご意見でした。2 グループの「公社分譲」では、老朽化・高齢化、建替もしくは修繕のどちらにすればいいのかが非常に大きな問題だ。それから管理組合を今どんどんつくっていったら、その設立と運営が非常に問題になっているという話でした。その解決に向けては、明舞団地全体のマスタープランが必要ではないか。建替にあたっては、ベースになる基金的なものを含め、やはり公的支援制度が必要になるだろうと。住宅を建替える時には、非常にお金もかかりますが、住民のエネルギーたるやものすごいものがが必要です。一棟全部建替えようと思えば全員の合意が必要で、それを何とかするエネルギーたるや大変なことです。3 グループは同じく「公社分譲」です。管理組合の運営のあり方、自主管理組織の育成、役員個人の負担、絶対的な情報量の不足、意思統一機関の第三者の仲裁役の欠如、お金の管理と、いろいろな問題があると指摘されました。これも行政の協力により、シンポジウムやコミュニケーションの場で、自主管理組織を育成していくことから始めなければいけない。言えば、住民が団結しなければ何もできないということです。4 グループの「戸建住宅」では、土地の細分化の問題が出ました。かなり余裕のある大きな敷地ですが、たとえば相続などで2戸や3戸に分かれていくことを細分化と言いますが、そうなるとうごく過密なまちになっていく可能性があります。土地利用の問題としては、少し離れた集合住宅が高層に建替わっていけばどうなるのかという問題があります。それから、もう既にあるかも分かりませんが、人口が減っていくと空地や空き家が増えていきます。その解決方法としては、一番大事なのがコミュニティで、「合意形成を図るためのコミュニティの輪を広げよう」という言葉が出ています。この言葉が、ワークショップの中でたくさん出てきました。コミュニティと合意形成。まちづくりは、住民が皆で考えて地域の総意としてこんなまちにしていきたいと思いますということを決めて活動していくことなのです。地域の合意形成のためには、良い関係のコミュニティが無いと話もできません。このワークショップでは、改めてコミュニティと合意形成の重要さが再認識されたという役割があったと思います。

個々具体的な話については、明舞センターの話をする中で北センターや松ヶ丘ショップの話も出ました。それから地域の中には、道路や広場、駐車場などの交通関係の施設。それからこの団地は公園がきちん整備されていますが、その公園をどうしていくのか。また、先ほどの住宅をどうしていくのかという話もあります。後ほどご説明があります団地再生計画等に、これまでのワークショップの中から出てきた重要なお意見を反映させていただいたと伺っています。その辺につきましては、この後ご説明があると思います。

(2) 明舞団地の再生・活性化について(大町勝氏:兵庫県県土整備部まちづくり局住宅地課)

明舞団地再生の基本方針

最初に、ワークショップの意見を受けて様々な要因を加味して考えました明舞団地再生の基本方針をご紹介します。ワークショップでの居住者のご意見を数えたら、950 項目ものたくさんのご意見がありました。それを県の方で分類して分析させていただき、5 項目で整理して定めさせていただきました。一番目の「全ての世代の人々が、豊かで、自立した居住生活を実現する。」というのは、明舞団地は非常に高齢化が進んでいますので、高齢者の方々のための施策を考えるのは当然ですが、それだけではなくて団地の中に若い人たちの流入を促



して来ていただくということも考えないと駄目だということです。二番目の『**住民主体のマネジメントのもと共助による居住生活を実現する。**』は、マネジメントという言葉はちょっと分かりにくいのですが、住民の方々が主体となってまちづくりに、運営や管理に携わっていきましょうということです。三番目の『**既存ストック・地域資産の活用による持続的な再生・更新を推進する。**』は、昔は全てを撤去してから全てを一挙にやるというやり方があったかもしれませんが、これからはそういう時代ではありませんで、持続的に徐々に計画的に皆さんと一緒に更新していきましょうということです。四番目の『**住まい・まちづくりを先導する再生・活性化を推進する。**』に関しては、どちらかと言えば役所の立場ですが、明舞団地での高齢化や建物の老朽化という話は、今後一般市街地でも発生する話ですので、先取りしているいろいろな施策を展開していきたいと考えています。最後の『**安全・安心に暮らせる住まい・まちづくりを推進する。**』は、神戸市も明石市も阪神・淡路大震災の被災地です。その教訓を受けるということと、ワークショップでもありましたが、最近犯罪が増えているので防犯の話も重要だということです。

明舞団地再生ビジョン

明舞団地再生ビジョンは取り組みの指針です。していきたいことを具体的に 4 項目で整理しました。まず『**表情豊かなまちづくりを目指ましょう！**』ですが、これはまちの構造、まち全体に関わる話です。たとえば主要幹線を“賑わい創出ゾーン”や“緑化修景ゾーン”にする。また皆さんは、明舞センターの話に非常に興味を持っておられますし、まちの中心には間違いが無いわけです。それを昔の賑わいを取り戻そうということで、「まちの中心を取り戻す！」としています。「メリハリのあるまちへ！」は、今は 5 階建ての中小住宅がほとんどですが、そういう均一的なものではなくて変化のあるまち、景観をつくっていききたいということです。二つ目の『**安心して住み続けられる住宅を手にしましょう！**』は、住宅・住宅地の再生です。まず「豊かで自立した多様な住まいの獲得」ということで、高齢者の方から子育て世帯までの様々な住宅が必要だということです。「个性的で美しい住宅地景観の形成へ」「居住者による住まい・まちづくり」は、明舞団地は公団住宅や県営住宅の賃貸だけではなくて、当然公社分譲マンションや戸建住宅があります。そちらに関しては、お住まいの方々主体で住まい・まちづくりをしていくことになりますが、それを役所が側面的に支援していきましょうということです。「安全で安心した住宅地の形成」の話もあります。三つ目の『**暮らしを豊かにする住環境をつくりましょう！**』は、この中央センターを“まちの核”にしたいということです。バリアフリーの話もあります。それから今センターに NPO のの方々に入っただけですが、そういう生活サービスの提供や、皆さん方自らの地域活動の活性化が必要だということです。四つ目の『**住民が主人公のまちづくりを実践ましょう！**』は、一つは住民や NPO が主体となって住環境を守る。それから、公共賃貸住宅の円滑な運営に関しても、公団や県だけに任すのではなくて、自分たちでも環境改善ができるのではないかというようなことです。

明舞団地再生計画の位置づけ

今回皆さんの意見をお聞きして、県で明舞団地再生計画をつくりつつあります。まとまりましたら改めて来年度に、きちんとした形で報告したいと思っています。ただこれは、皆さんの意見を聞いて県がつくったものです。来年度以降、これに基づいて徐々に物事が動いていきますが、時代も変わっていきますし、本当にこれでいいのかという話も多分あると思います。ですから、この計画に固定するのではなくて、住民や行政、そして当然公社や NPO と、きちんとした連携組織の中で、見直す必要があれば見直していくという形になれば一番いいのではないかと考えています。極端な言い方もかもしれませんが、我々がつくる明舞団地再生計画は、一つのたたき台と考えていただければ結構だと思っています。

平成 16 年度における明舞団地再生の取り組み

昭和 39 年に、西舞子団地に初めて住民の方が入居されてから、平成 16 年が街開き 40 周年になります。県もあまりお金がありませんので大層なことではできませんが、この機会に皆さん方と一緒に記念事業

を考えていきたいと思っています。シンポジウムや公開講座、それからセンターの中の空き店舗を活用して街角広場をつくりたいと思っています。そして、住民主体のまちづくり活動ということで、住民の方々自らが動かなければならない戸建住宅地や分譲マンションなどに関しても、我々の方からできるだけ支援をしていきたいと考えているところです。

まちづくりサポーターの募集

まちづくりサポーターと言うと警戒されるのではないかと思います、そんなに大層なものではありません。まちづくりに興味がある方や、時間があるから様々な活動に参加したいと思われている方がおられましたら、おっしゃってください。こちらからは何かをしてくださいと言う気はありませんが、少なくともこれから何かある時はご連絡させていただきましますし、興味があれば様々な活動に参加していただけるような仕組みにしたいと思っています。登録していただいた方々が、今後どのようにまちづくりに参加していただけるかに関しても、県でやってくれるということではなく、既存の自治会の方々や NPO のの方々、商店街の方々、どうい体制をつくっていけばいいかについても一緒に考えていきたいと思っています。

(3) 「くらしの安全・安心・コミュニティ」マップについて(小島彰夫氏:松が丘校区連合自治会)



マップづくりの概要

松が丘校区「くらしの安全・安心・コミュニティ」マップは、支援はいただいておりますが行政主導ではなく、住民の住民による住民のためのまちづくり活動として、住民だけでつくったという特色があります。地域を調べる中で、まちの中の素晴らしいところや誇りになるところを明らかにしていきました。そのことが住民の誇りになり、まちに対する愛着心を育てることになるのではないかと考えています。マップをつくる過程において、人と人が触れ合いますので、コミュニティづくりにも非常に役立つのではないかと思います。つくるきっかけは、まちができてから35年経っており、まちを見直す必要があるという話が校区連合の自治会の中で時々出ていたこと、明石市民未来会議でもマップをつくるという話が出ていました。また、松が丘校区にあるあかねが丘学園ふるさと学科の方がバリアフリーの調査をしておられたことも重なり、一緒にマップをつくらうではないかということで始めました。マップの趣旨と目的ですが、まちづくりの安心・安全ということは避けられない最重要課題であり、何としてもまちを調べて、住民が安全で安心な暮らしができるようにということがありました。また、マップ作成において、お金が無いということが一番の問題でした。つくって全戸配布するとなると数十万円が必要で、県の助成金をいただいたり、いろいろなところからお金をかき集めたりして、何とかつくることができました。調査員が校区からどれだけ出ただけか、専門的な知識を持った方にどれだけ協力いただけるかとも問題でした。調査したものをどのように表示するか、パソコンを使って地図を表示することが非常に大変な問題だったように思います。まず、平成15年4月17日に明石市民未来会議と共同で取り組み始めました。住民の校区調査を、計438人が参加して4回行いました。9月11日には240人の方に参加いただきました。松が丘小学校の子どもたちと一緒に調査し、特に学校の総合学習と連携したり、研究授業や研究会にも参加させていただいたりしました。会合は延べ64回、参加人数は延1,020人、現在は1,200人を超えていますが、そういう中で校正を重ねてやっとの間できたところです。どのように地図に表示するかということも大変な問題でしたが、いろいろな方がアイデアを出して、子どもたちも素晴らしいアイデアを出してくれて、地図ができあがっていったということです。

マップの内容

最初に「**松が丘校区**ってどんなまち」というのがあります。人口が急激に減って、高齢化率が右肩上がりですと上がっています。65歳以上の方が松が丘校区では27%、特に松が丘3丁目は36%を超え

ており、そのことでいろいろな問題が起こっています。松が丘は丘陵地帯を開発していますので、階段が多くスロープがあまりありません。特に明石側はそうした問題点が多いように思います。『防災・防犯関係』については、あまり表示できなくてソフト面が多いのですが、明舞中央病院の前の道路の交通量が、最近非常に多くなっています。危険な箇所なので、横断歩道設置の要望がかなりたくさん出ています。できれば信号付きの横断歩道なのですが、これは行政や交通安全協会に依頼しなければなりません。そのすぐ下には、ユニバーサルデザインの非常に素晴らしいゲートやスロープができています。朝霧公園の入り口にも、スロープと階段を一緒に合わせた非常に素晴らしいものができています。それから、『福祉・医療・育児・文化・健康と生きがいづくり』の関係のものを地図上に表しました。更に詳しく、たとえば福祉関係で老人憩いの家があるのですが、誰が出入りできて、いつ何をしているのかということも表しました。文化施設や病院関係も表しています。『まちを知って便利で豊かな暮らしを！』は、日常生活環境についてまとめました。昨日も早速マップを見た方が、郵便ポストがこのあたりに無いのでつくってもらったらどうかという意見もいただきました。明舞センターや松が丘ショップ、朝霧駅周辺やバザール明舞と、日常生活の中で暮らしに密接な関係があるものを取り出して表しています。住民の方々がこれを活用して、便利で豊かな生活をしていただければと思います。それから、『まち自慢』です。「幸せは歩いてこない だから 歩いていきましょう！」というサブタイトルを付けていますが、まちの中には素晴らしいものがたくさんあります。たくさんの桜並木があり、いろいろな木が植栽されている道路があります。南には、眺めが非常に素晴らしい朝霧公園がありますが、前に団地があり眺めが少し充分ではありません。できればここに展望台をつくって眺めのいい景色を見ていただけたらという計画を持っています。これは行政にお願いすることも大事ですが、住民で何とかつくれないかという話も出ています。

調査の視点

まちを調査するにあたり、どういう視点でまちを見るかが非常に難しいところで、6項目に分けて調査しました。人が集まらなければ、そこまでの調査をしなくてもいいのではないかという意見もありました。しかし、私はいろいろな視点でまちを見ていただきたいと。子どもの視点、おとなの視点、高齢者の視点、男性の視点、女性の視点、できれば時刻や季節によっても調査したいと思いました。それは果たせませんでした。たくさんの方にいろいろな視点で調査をしていただきました。また、子どもと一緒にやっての調査は、おとなと子どもの交流もさることながら、まちを調査することによって、自分たちのまちだという愛着心が育てば、させられるまちづくりから、するまちづくり、あるいはしなければおれないまちづくりになっていくと思っています。

今後の計画

これからは、自治会で取り組むもの、県・市・住宅公団その他に依頼するもの、行政と共に協働で活動を進めるものの3つに整理して取り組んでいきたい。特に行政にお願いする分については、優先順位をつけてお願いしていきたくと思っています。何と言っても防犯活動が緊急課題で、既に始めています。子どもたちが登校する時間に立ち、子どもたちに挨拶をしています。始めはなかなか挨拶しませんでした。最近はおとなも子どもも積極的に挨拶してくれるようになっていきます。来年度は更に腕章やのぼりを用意して、活発な活動が進めることができるように計画を立てています。

(4) 空き店舗を利用した再生モデル事業について

ふれあい広場ひまわり(大西登子氏)

私たち婦人会は、昨年10月に明舞団地再生モデル事業としてふれあい広場を開設しました。従来の婦人会活動に加えて、各種の相談会や講習会を開催できる活動拠点となり、世代間の交流やコミュニケーションの場として地域の皆さんに喜ばれています。

主な活動としては、婦人会活動の拠点として気軽に話し合える場となるよう、火曜日の定休日を除いて午前 9 時から午後 5 時まで、会員が午前・午後二人ずつ常駐して常時開設しています。時間に関係なく気軽に話し合えるように、200 円のお菓子付きのコーヒー・紅茶や小物の販売なども行っています。会員や地域の方の手づくり作品なども委託販売しています。また木曜日はディサービスの日として、寝たきりにならないように元気な高齢者の皆さんに楽しい一日を過ごしていただいています。また毎月婦人会ニュースを発行して、婦人会とふれあい広場の行事日程や、催しの写真や内容を掲示して PR に努めています。一人でも多くの人に参加していただけるように、行事や催しの内容を充実させるべく努力しています。多くの人と悩みや楽しみを共有していくために、誰もが気軽に相談し合える場として、高齢者よろず相談を生活情報センターから 2 名の先生においでいただき、毎月第 2・第 3 金曜日に開いています。子育て相談会は地域の児童委員さん 2 名に来ていただき、第 1・第 4 の水曜日に開いています。健康のための講習会としては、民謡講習会を毎週火曜日、ヨガ講習会を毎週水曜日の午後 6 時 30 分から行っています。また趣味の同好会として、木目込みの講習会や手芸の講習会なども不定期ですが行っています。高齢者よろず相談は 2 件ありましたが、解決しています。高齢者の方は相談会ではなく、ふれあい広場でコーヒーや紅茶を飲みながらの話や相談が多いと思います。



6 ヶ月を経過して私たちは多くのことを学びました。今後の課題として第一に、ふれあい広場という常設の場所ができ、互いが顔見知りになる機会が増えました。地域活動の大きな柱は、多くの人互いに顔見知りになることから始まります。顔見知りになって挨拶をして初めてコミュニケーションが始まります。そういう場がこのふれあい広場なのです。もっと多くの人に集まっていただき、ふれあうことの楽しさを体験してほしいと願っています。第二に、こうした輪を更に強くするために、各種の相談や講習会を開催し、悩みや楽しさを共有し合う場として大きな柱になるよう充実、強化していきます。また、地域の皆さんや自治会・商店街の皆さんと協力して、地域の活性化に力を注ぎたいと考えています。第三に、これまでは開設や工事費の復元費用などで 100 万円が必要でした。今年の 4 月からは、100%運営費に回すことができますし、喫茶売り上げを収益とする営業も順調ですので、行事や催し、講習会などを強化していきたいと思っています。

最後に、高齢化社会は、地域の方々が日常的にふれあう場を通じて、一人一人が参画する土壌と風土をつくりあげなければなりません。互いに助け合い励ましあって、生きることの喜びを感じられるような地域社会が必要だと考えています。そのためには、行政の助けも必要です。ボランティアの方々の助けも必要です。私たち婦人会が、その橋渡しの役目を果たせればと思っています。

よりあいクラブ明舞(入江一恵氏)

私たちは、10 月からの県の明舞団地再生事業に参加したのですが、ぎりぎりの 10 月 30 日よりあいクラブ明舞・ひまわりをオープンして、やっと仲間入りをしました。理念として、食を通した福祉コミュニティづくりということを掲げています。ご承知のように一番奥の場所です。そこで一体何ができるかということで、まず明るさを提供したいと「ひまわり」という愛称をつけました。

私たちはひょうご農業クラブという NPO 法人で、相生・千草を中心とした提携農家があります。まずはそこから野菜、お米、果物を廻していただき、有機・無農薬・減農薬野菜の販売を始めました。それらの食材や地場の明石のお魚を使ってのふれあい食堂とふれあい喫茶が二番目の柱です。三番目は、配食サービスやミニサービス



ということで、三本の柱を掲げて出発しました。NPOとして参加したのですが、この土地に明るい者はいませんでした。私自身は明石の太寺から来ています。ボランティアは長田から来ている者もいます。震災後、長田の宅老所でボランティアをずっとやっていて食事サービスではベテランの者といった、本当に寄り合い所帯で始まったわけです。

私が一番に考えたのは、どのようにして明舞地域の方々に私たちの考えるサービスを理解していただき、それを受けてくださるかということです。まずは情報提供に頭を悩ませました。それから地元の方にボランティアとして参加いただくこともネックでした。外から来ましたので、どうしても知り合いが少ないわけなのです。新聞チラシやスタッフのポスティングで、情報提供をやっていきましたが、最初はなかなか効果がありませんでした。しかし、食というのは本当に命の源です。そして、自分の舌で味わったものはとても強みがあります。食事していただいた方から、ひまわりの食事は薄味で体にいい、1日30食品と厚生労働省が言っているが、昼の食事だけで20種類ぐらいの食材を使っている、野菜が多い、魚が多い、外国のものはあまり使っていないようだということが口コミで伝わり、これが一番力強い情報源でした。口コミで伝えられたお客様が利用してくださり、固定した利用のお客様が段々と増えてきています。

私たちは長続きするために無理をしないということで、食堂は週2日から、3日と立ち上げてきて、今年の1月から週4日営業しています。そうしますと、新聞やラジオで情報が伝わり、お年寄りの中には新聞の切り抜きを持って来られて、この記事のお店はここですねと言われて食事してください。ラジオの取材で、利用者の独り暮らしの高齢者の男性に突然マイクを向けたことがありました。10年前にお連れを亡くされた方ですが、「ひまわりは私の命の泉です」と言われました。次の日に、私が「あれは文学的表現すぎたのではないですか」と言いますと、「突然に向けられたのだから、文学的も何もなくて、普段思っていたことがつい口から出ました」と言われたので、私はその言葉に感動しました。そういうことが段々と口コミで伝わりました結果、最初は外人部隊での営業でしたが、松が丘や多聞台から毎日のようにボランティアをやらせてほしいという方が来られるようになり、今では30名になっています。この30名のボランティアがローテーションを組んで、1日8名から10名でやっています。料理の勉強になる、あるいはお年寄りのうれしそうな顔を見たら元気が出ると、お互いに癒し癒される関係で事業が進んでいます。

いろいろ問題もありますが、野菜部門は、減農薬・無農薬・有機野菜や季節のものを販売しています。食堂部門では一汁三菜ということで、塩分を控えめにして脂肪を少し抑えてやっています。塩分は1日10gと言われますが、1食で3g以下に押さえるのは非常に難しいことで、私が栄養価を計算しますと、大体2.8gです。これは旨みを入れなければ味覚の満足は得られませんので、出汁を取ることを中心にしています。いわゆる袋の味ではなくて、いりこで味噌汁、鰹節と昆布で煮物の出汁ということを守り続けていきたいと思っています。いい素材を使っていますから、経営状態は大変難しいのですが、NPOですから有償の方を2名に限り、無償ボランティアの皆さんには納得していただいた上でやっています。

そうした中で、夜の配食の希望が増えてきています。この後で松田さんから実態調査の報告がありますが、朝食を食べない方、夕食について非常に困っている方、昼は病院に行って帰りに外食なさる方、外食は嫌で家庭の味がほしい方など、高齢者と言ってもいろいろな条件の下で暮らされています。95歳の母親と78歳の足が悪い息子さんが暮らしているという家庭もあり、昼・夜とも配食してほしいという希望もあります。こうした別個のニーズに応えることは、行政がやっている配食サービスではできないことだと思っています。こういう人たちをフォローしていくことがNPOの使命ではないかと考えています。こういう多様な状況に対応するためには、もっとスタッフが必要なのです。夜の配食は、夜に配食できるカーボランティアが絶対必要になってきます。今後とも、明舞団地の方々のご協力とご支援、ご理解によって、この事業を展開していきたいと思っていますので、よろしく願います。

明舞いこいのスペース(松田実氏)



人が多様化しているように、NPOも非常に多様化しているいろいろなNPOがありますが、私たちが肝に銘じていることが3つあります。個人の思いをより効果的に普遍化するために組織化された民間法人であるということが一点です。当然オープンでクリーンでなくてははいけません。二点目は、思いを持った自主的な人が社会的な目的を達成するために集まったということです。誰からも指示されずに、志のある人が集まったということが一番の強みだと思っています。三番目は、特定非営利ということで、営利を目的とした団体では無いということです。いろいろな活動をすると多少の利益は出るわけですが、それを個人の報酬に反映せずに次の継続性のために使う。社会的弱者や困っている方に還元できるような活動を続けていくために使うという意味で、特定非営利という団体だと認識しています。そういう観点を踏まえ、3つのNPOが共同で去年の10月から、明舞センター2階でコミュニティ活動を中心に展開してきました。住宅管理の専門NPOである「まちいきいきネット」、保険とライフプランナーの暮らし方の専門NPOの「ライフ&キャリアサポートセンター」、それと福祉と農業体験の「アグリネット」の3つのNPOがそれぞれ強みを出し合い、総合的に福祉活動、人づくり、まちづくりを支援し、多様ないろいろな年齢層の人が安心して自立していける社会を目指していこうと思っています。明舞団地は、朝霧駅から神陵台までかなり広範囲で住宅環境も非常に多様化しています。個人も多様化しており、個人と地域の結びつき、それと行政との絡みについて、いろいろな展開があっただけではないかと思っています。そういう面で、その明舞の2階を中心に、福祉と生活、地域環境、生きがい就労をキーワードにして今後とも活動していきます。

具体的に、福祉のネットワークづくりとして、高齢化という面では、介護保険などの充実は当然ですが、それだけで充分かどうかは疑問です。その狭間で苦しんでいる人を掘り起こして、人間として重要な人と人のふれあい活動をやっていききたい。金銭に換えられない近所づきあい、お互いに見守り見守られ合うという暮らし方は、お互いがちょっとしたことでできるとしています。そういう個人のちょっとした支援が大きな力になるように、ボランティアも募集しています。二番目に生活のネットワークづくりとして、地域の方が自分の楽しみにしている手づくり講座の場を提供しています。現在、月100人ぐらいの利用者が、150から160ぐらいへと徐々に浸透してきています。自分をもっと社会に向けて発信できるように、場の提供を今後も続けていきます。同時に、私たちの強みである住宅関連や暮らし方に関して、専門家が土日主体に無料相談日を設けています。住宅関連や社会保険、年金の無料相談ですのでご利用いただきたいと思っています。更に、私たちはパソコンを非常に重要な武器として考えています。高齢者の方主体にマンツーマンでパソコン教室を開き、月10名前後の方を指導させていただいています。その中で、高齢者の方や初心者の方は、つまづいた時にちょっとしたアドバイスで進捗がものすごく変わってくることに気づきました。ですから、一人一人に充分ヒアリングをした上で、個人に応じた形の目的意識を持ったパソコン教室を運営しています。これを広げていき、ネットコミュニティの展開もやっていきたいと思っています。高齢者予備軍の40歳50歳の若年層も含めてのコミュニティの場。普段は仕事で来られませんから、ちょっとしたでも情報を提供して、できることでの社会参加ができるようにしていきたいと思っています。環境と就労のネットワークでは、私たちは大久保で農園管理をしていますが、公園の清掃で落ち葉の廃棄で困り焼却していると聞いています。若干でも落ち葉を堆肥づくりに活用するような循環形の展開へ持っていき、公園清掃とかで地域の人と一体となって、多少僅かでも就労の機会を見つけていきたいと思っています。

先ほどもありましたが、福祉と食農にターゲットを絞ってアンケート調査を行いました。明舞センターの近くの半径1.5kmぐらいのところにアンケートを3千部ほど配りました。30%以上の非常に高い回収率で、地域の方の意識の高まりと期待度を改めて認知しました。現在、年齢別や住居環境別、性別、職業別な

どの細かい分析をやっていきます。今後報告なり、活動に反映させていきたいと思っておりますが、その中で特に顕著なこととして、友人が非常に少ないことがあります。特に独り暮らしの50%以上の方が、友人がいないとはっきり答えています。同時に、50歳代60歳代の方も、友人関係が少ないという数値も出ています。そういう面で、新たな転換が必要ではないかと判断しています。必要なサポートとして大きくあがってきたことは、リフォームの問題や電球交換、家庭電化製品の修理に困っているという声があります。不用品の処分やバリアフリーの問題も、サポートを受けたいということが分かりました。食生活については、先ほどの報告にありましたように、特に独り暮らし、少人数の家庭になるほど、朝食抜きが何と45%、昼食抜きが40%ということが分かりました。食の勉強会や料理教室をしてほしいという要望もあり、ひまわりさんと連携してやっていきたいと思っております。それと、明舞商店街の利用率が、明舞センターから1.5kmの範囲ですから非常に高いわけですが、年齢層別に見ると、やはり30代20代の人、より活動的な年代の人の利用率が非常に低いという数字がはっきり出ており、その中でも食料品が高いという声があります。今は、新店舗がオープンして非常に賑わいを見せています。普段は平日の方が人出は多いのですが、今日の土曜日は非常に多い。これだけ若い人がいたのかと思うぐらい出てきているということは、的確にそういう仕掛けをやれば出てくるのだということを確認しました。

そういう面も含めて、今後イベントなり継続性のあることを念頭に入れて活動していきたいと思っております。そしてボランティアということで、1階2階のNPOと北センターのNPOを、のぞくだけでものぞいていただき、ちょっとした参加で結構ですから、それが10人20人集まれば大きな力になると思っております。今後この分析資料を充分活用して活動を展開していきますので、よろしくお願ひしたいと思っております。



・パネルディスカッション「これからの明舞団地を考える！」

コーディネーター：野崎隆一氏(神戸まちづくり研究所事務局長)

パネリスト：西中須町子氏(明舞まちづくり推進協議会会長)

小高平氏(明舞まちづくり推進協議会副会長)

小林明夫氏(明舞センター商店会会長)

玉田千寿子氏(明舞まちづくりサポーター)

河田重一氏(明舞まちづくりサポーター)

入江一恵氏(よりあいクラブ明舞代表)

コメンテーター：小森星児氏(ひょうごボランティアプラザ所長)

はじめに (野崎隆一氏：神戸まちづくり研究所事務局長)

最初に前に座っている方々のご紹介をさせていただきます。私の隣から、地元の神戸側の代表として来ていただきました西中須さんです。そのお隣が、明石側として小高さん。次が、商業者として小林さんです。そのお隣が、狩口台の玉田さんと神陵台の河田さんです。それから先ほど発表していただきました入江さん。最後が、コメンテーターとして来ていただいた明舞団地再生委員会委員長の小森先生です。先ほどの成果を挙げておられる発表を聞き、これからを楽しみにしています。まずは、ワークショップに参加して、あるいは先ほどの発表を聞いての感想とか、自分なりに気付いたことや発見したことを一言ずつお話いただければと思います。手前から順番にお願いします。



住民組織でまちづくりを (西中須町子氏：明舞まちづくり推進協議会会長)

過去4回ワークショップをしてきましたが、ちょっと気付いたのは、明舞団地に住んで30年40年になりますが、住民の組織で、住民と商店街の皆さんと一緒に、本当にこの中央のことや、明舞団地の活性化を考えて20年になります。ところが震災があったり、途中でやめたりして、今回再び新たに県からの打ち出しで、こういうことになったのですが、これからはやはり我々地元の住民が、本当に商店街とかいろいろなところと一体となって考えていかないことには、まちづくりはできないということを今日はずくづくと思いました。いろいろなところから、いろいろなことでサポートしていただきますが、まず我々地域の住民が本当に、今までやってきたところの良いところを取って行って頑張っていきたいと思っています。



地域住民との良好なコミュニティが一番大切 (小高平氏：明舞まちづくり推進協議会副会長)



明石側ということですが、松が丘校区連合の中の一自治会、南県住自治会の会長をしています。マップづくりは皆さんのいろいろな協力があり、大体立派なものができたと非常に喜んでます。これには先ほど言われました、地域住民との良好なコミュニティが一番大切ではないかと思います。私どもの県営住宅は460戸ですが、非常に高齢の方もいらっしゃいます。その中でコミュニティをやるにはどうしたらいいかと日夜悩みいろいろ考え、皆さん方が集まれる場所の集会所を解放しています。そういうようないろいろなことを考えて2年目になりますが、何とか軌道に乗っていていると考えています。やはりコミュニティが一番大切で

はないか、それが活性化につながるのではないかと考えています。

お客様のニーズに合った元気な商店街へ（小林明夫氏：明舞センター商店会会長）

私が商店会会長に就任してからまだ 1 年半です。それまで何も知らずにやってきましたが、就任した時には店舗が 7 店舗空いていました。それで今年 3 月 24 日にスーパー新撰組、今日はトップアベニューが開店しています。我々が一生懸命空き店舗を無くして、お客さんに便利だと来ていただけるようになるために、各役員さんが走り回って、やっとこういう状態になってきています。また、フリーレンタル活用という形で、現在、山崎という陶器屋もオープンしていますし、スーパー新撰組にいたっては 3 店舗ぶち抜きで、安い商品をお客様に供給するというコンセプトを持ちながらやっています。我々が専門店として生きていくには何が大事かということは、量販店とかいろいろな形での出店はありますが、やはり足まめ手まめ口まめということで、お客様のニーズに合った商品を売っていかねばいけないということです。そのことが、ここ 1 年でやっと分かってきたということで一生懸命やっております。



まだまだお客様に対して納得いくような商店街にはなっていませんが、今日の話とワークショップのいろいろ資料を見た中から、我々商業者側にも一つ一つ解決していかねばいけない問題がいろいろあるのではないかと思いました。そして我々はやはり元気な商店であるようにしていかねばいけない。民間と官とが一緒に手をつなぎながら、何か新しいものをつくっていかねばいけないということを、我々自身が考えなければならぬし、我々商業者ももっと勉強して研修していくことで、小さな弱い力を強くしていくことを今後考えていかねばいけないと思いました。

明舞団地全体の計画の中で考える（玉田千寿子氏：明舞まちづくりサポーター）

狩口台の分譲住宅ですが、建ってから 35 年になります。越して来てから 30 年以上ずっと見ていまして、最初は朝霧駅が無かったです。今、乗客数のデータを見ていましたら、朝霧駅で乗り降りする方の人口がすごく増えています。駅ができた当時の明舞センターのあり方と、今のあり方とは違ってくると思うのです。昨年一年のワークショップに参加させていただき、神陵台の広い一戸建ての方や自分の地域の方とお話する機会がありました。やはり明舞団地というのは、神陵台からずーっと下までの景観も全部取り入れた中で、全体的な計画の中で考えなければいけないのではないかなと思います。



サポーターの方がもう少し増えていただきたいというのは、やはり広い地域で考えたいということがあります。そして、こういう堅苦しい場ではなくて、誰でも気軽に参加できる、もう少し遊び感覚の井戸端会議的なところでご意見が伺える場があればと思います。そういう提案やお声掛けを、これからしていきたいと思っています。

シニアの参加による地域活動の活性化を（河田重一氏：明舞まちづくりサポーター）

神陵台 9 丁目は、530 戸ぐらいの全て一戸建ての住宅です。そこで会長を仰せつかっていますが、サポーターが大切だと思い、ずっとワークショップに参加してきました。ワークショップでやられたことというのは、行政の財政そのものが破綻してくる中で、要求型の民主主義から住民参加型の民主主義に変わりつつあるのではないかとということです。それがこのワークショップの良かった点ではないかと思えます。



私は 60 歳定年後をシニアという定義をしているのですが、定年になったからもう終着駅だという意識で家に閉じこもっている人もたくさんいると思います。そういうシニアが、兵庫県下で人口の 24.9%ぐらい、明舞団地は調べていませんがもっと高いと思います。今日、朝霧駅の乗車人員の推移グラフを持ってきていますが、朝霧駅ができたのが1968年です。この時は、まだ4,847人です。西舞子団地ができ、南多聞台県住が12号棟ぐらいまでできて、朝霧駅ができた時です。最初は非常に少ないのですが、ピーク時は2万人近くにもなっています。震災の時に少しだけ減っていますが、またドーンと減ってきて、ドーナツ化してきています。やはり明舞団地は、こういう形でシニアが一杯増えているのではないかと。そういうシニアの方々が、まちづくりに貢献していく、参加していくという意識をもっとPRして、もっと多くのシニアの参加による地域活動の活性化をやらないと明舞団地は活性化しないと思うのです。

ここにおられる皆さんが、後二人三人と増やしていけば、明石市が1,020人のサポーターであれだけ素晴らしいマップづくりをやっておられるように、明舞団地の活性化のために、やはり500人、1,000人の応援団をどうしてもつくっていただきたいと思います。レバノン戦の最後に山本ジャパン監督がインタビューで、「サポーターに支えられて五輪を手にした」と言っていました。ぜひ多くのサポーターの加入をお願いしたいと思います。

潜在的ボランティアと異世代交流（入江一恵氏：よりあいクラブ明舞代表）

皆さんと明舞団地のことを考えるのは、明舞センターに入る前に、ワークショップに参加させていただいた時からです。まちづくり協議会の方々とかと同じグループでいろいろ話し合う中で、本当に明舞団地の方の抱えている問題のあまりにも大きくて非常に難しいこと、しかしそれにも勝る熱意というものに私は打たれました。私が住んでいます明石の地域では、こうした非常に熱心なまちづくりの話し合いはあまりなされていません。それだけに、NPOとして私がここに参加できるということの喜びをその時に感じました。

私自身は、震災後から神戸の長田にある宅老所で、ボランティアとして関わってきました。高齢者の食事サービス、あるいは痴呆性的高齢者と話さず、いろいろ感じたことやそこで得た経験を活かせるのではないかと考えています。しかしこちらの地域での問題が、非常に高齢化率の高いまちでおひとり暮らしの方がかなりあるということがあります。私はコミュニティづくりが一番の根幹を成すものだと思っていますが、このふれあう場が非常に少ない。ふれあう場があったとしても、その人たちを誘い出す仕掛けが無い。先ほどのアンケート調査の結果でも、ひとり暮らしで友人がいないという方があまりにも多いわけです。その人たちが抱えている問題を一つ一つ掘り起こすためには、必ずそれに関わるボランティアが必要です。潜在的なボランティアは、かなりおられると思うのです。特に先ほど言われたシニアの方々の中にはおられると思います。子育て中の方は非常に忙しく、ボランティアまで手が回りにくく数が少ないのですが、この数の多いシニアの世代の人たち、この元気な高齢者の潜在的ボランティアを発掘すること。この両方がうまく機能するような仕掛けをつくっていくことが大事ではないかと常々考えています。

私が今こちらでやらせていただいていることは、ほんの一步だと思っています。その中でいろいろな状況の高齢者の様子をつかめること。それを通して生きがいを見いだす高齢者、そしてふれあう場をつくれる高齢者をつくっていく。更に、私の住んでいる地域で先日ありました多世代交流に久しぶりに参加して、子どもたちと一緒に遊ぶことで随分元気をいただきました。この異世代交流を、ぜひいろいろな地域でやりたいと思っています。また、私はよりあいクラブ明舞を開業する前に、千里ニュータウンに入りました。西の明舞団地、東の千里と非常に有名で、同じような状態があるのではないかと考えたからです。豊中の街角広場というところに参りました。そこは、自分のところで水を活性炭できれいにして、それでコーヒーを入

れて喫茶をやっているだけなのですが、ひまわりと条件が違うところは、すぐ前が木立で日がさんさんと輝いています。そして、小学生が帰りに必ず寄って水を飲むのです。この水はおいしいと言って、その水を凍らせた氷をもらって喜んで遊んで帰る。高齢者は1時間も2時間も一杯のコーヒーや紅茶をいただく。そこで自然に子どもたちと高齢者の交流ができています。そういう子どもたちと高齢者がふれあえる場というのは、この明舞団地の広い緑の多い広場で必ずあるはずだと思うのです。そういうところをつくっていくために、皆さんと一緒に考えていきたいと思います。

西中須さんと小高さんに、住民中心でやっていかなければいけないとか、コミュニティや人づくりが大事だというご意見をいただいたのですが、推進協議会や自治会での活動の中で、これから取り組みたいことや、こんなことをやればどうかということがあれば、お二人にお話をいただきたいと思います。

独り暮らしの方が入っていただけるようなものを (小高平氏)

NPOの方が言われたことを実践しています。たとえば、月・水・金は朝10時から集会所を解放しています。何人かの方が来られて、自分たちでお茶を持ち寄りおしゃべりして、昼ごはんは自分たちでラーメンなどを買ってきて食べたりして、なおかつ1時ぐらいからグランドゴルフとかをやっています。

私のところの460戸の自治会ですが、健寿会という会は、老人会が健寿会という名前に変わったのですが、今年68名の会員がいます。高齢者はもっとたくさんおられますが、独り暮らしの男性はその中にとけ込めない。女性は案外とけ込めますが、なかなかとけ込んでいただけません。それを何とかとけ込んでいただくために、どんな仕掛けがいいのか。健寿会の会長や皆さんと相談して、まずは自分の足元でコミュニティが果たせたらと思っています。小島さんから説明があった防犯についても、私どもで朝7時半から8時半まで6名ぐらいの人が、毎日子どもたちの安全を見守って立っています。それで子どもたちが、地域の人たちとの挨拶ができるようになりました。今は、ユニホームをつくりたい、帽子をかぶりたい、のぼりを立ててやりたい。そういうことで、今の健寿会ではなくて、本当の独り暮らしの方が入っていただけるようなものをつくりたいと考えています。

明舞団地はどこへ行っても自慢できる組織 (西中須町子氏)

明舞団地が全国でも珍しく、行政が違って仲良くしているということは、どこに行っても自慢できる組織だと思っています。この明舞まちづくり推進協議会は、住民はもちろんですが、各種団体に入っています。明石の方が神戸市で、神戸の方が明石でというのは、行政で禁じられていることがたくさんありますが、明石にはコミュニティセンターという素晴らしい施設があり、神戸市には各小学校区に地域福祉センターがあります。こちらにも狩口台地域福祉センターがあり、そこにはいろいろな老人会の方や子どもたちが皆来て、仲良く週に月・水・金は囲碁、火曜日は民謡を唄ったり踊ったりして、お年寄りが地域福祉センターでいろいろと交流をされています。地域でも防災訓練などの後に食事会とかいろいろなことをしています。やはり組織をきちんとした上でないと、地域でこういうことはできないと私は感じていますので頑張ります。

小林さんからは、商業者としてもっと視野を広げて勉強しなければというお話がありましたが、明舞センターの中のいろいろな商業者の方やNPOとの連携で、何か考えておられることがありますか。

商業者として仲良く協力していきたい (小林明夫氏)

今は、皆さんと一緒に行事に参加していくということと、NPOさんとも仲良くやっていかなければと思っ

ています。3～4年前に業種撤廃ということをやりました、今度入りましたスーパー新撰組でも、皆さんとコンタクトを取りながら、バッチングしているところの話合いが難しい時もありましたが、納得したわけです。ただ、業種撤廃したからと誰彼なしに入れればいいというものでもありません。長きにわたって業種をやっていく方がおられますので、その人たちの意見を聞きながらやっていかなければいけないと思っています。我々は商業者として、皆さんと仲良くやって、助け合えるものは助けていきたいし、協力できるものは協力していきたいと常々代々の会長も思っていましたし、私もそう思っています。

ただ、商業者として自分で自分の店を守るのに、それだけの時間がありませので参加はあまりできていませんが、それぞれの分野で活躍して良い意見などを聞いていると思いますので、それを心に持って皆さんと地域活動をやっていると思います。

玉田さんからは、団地全体の視野をという話がありました。もちろん団地全体を常にフィードバックしながら考えなければいけないのですが、これからは逆にそれぞれが考えていくエリアは、それぞれの特性があります。特に玉田さんのところは公社分譲ということでの課題もあると思うのですが、ワークショップでやったようなことを、地域レベルで考える場をどうつくっていくのかということをお聞きしたいと思います。河田さんは、シニアの力を利用しなければという話でした。どんな仕掛けをすればシニアの人がまちづくりに興味を持って参加してもらえるのかというあたりのお話いただきたいと思います。

分譲住宅同士のつながりも大切（玉田千寿子氏）

地域ということでは、ちょっと難しい状況になっています。神陵台までの県公社の分譲住宅の償還が終わり、管理組合の設立や規約づくり・運営づくりがあり、それと合わせて自治会もということで、役員さん自体がてんてこ舞いの状況です。うちの団地では、2～3年前から割と若い方が中心となって、再生を考える会というのをやっています。自治会でもなく、管理組合でもなく、一般の方が積極的に考える会のサポーターとしてペーパーの配布もして下さるし、いろいろな情報を集めてきてくださいます。そういう形で、この明舞のまちづくりも考えていきたいと思うのです。

それと分譲住宅同士のつながりも大切です。弁護士さんやマンション管理士さんに相談に行っても、こういう大規模で同じ団地型の専門の方が本当に少なく、自分たちで情報を集めて、それを共有しながら同時にまちづくりも考えていく必要があります。分譲住宅も南から北まですごい範囲で広がっていますので、それぞれ中だけで考えるのではなくて、近隣の戸建てや公園、本当に校区を巻き込んで考えていただきたい。そういう提案を今年中に何とか形にしたいと思っています。

明舞団地で本格的にシニアの意識調査を（河田重一氏）

終着駅は始発駅という北島三郎の歌があったと思いますが、定年になってからが始発駅だと思います。そういう点で全国の調査ですが、シニアの47.9%は何らかの形で地域活動に参加したいと思っているというアンケート結果が出ています。そういう人たちがなぜ、地域活動に参加しないのかという理由は、やはり本人の意思も重要な一つですが、取り巻く環境、受け入れ側の社会的な状況という3つの要素がシニアを活動に参加させる条件だと思うのです。取り巻く環境というのは、私はおじいちゃんとおばあちゃんの面倒を見ないといけなから家からは出せないとか、誰からも誘われないということもあると思うのです。

もう一つは、これは行政の問題でもあると思うのです。私は、駅ができる運動や、連合自治会を最初につくりあげる運動もしてきたのですが、そういうシニアが参加できる情報が少ないのです。大手の会社での定年後のライフスタイルについての1泊2日での研修や、行政の広報誌でも少しは出ているのですが、定年前にこういう地域活動がありますという教育を会社と行政もして、そういう方向で参加していただけるよ

うな社会的な状況をつくることが大切ではないかと考えています。

今後は、シニアの意識調査アンケートもできたら取りたいと思います。このシニア問題というのは、シニア社会学会という学会が2年ほど前にでき、学問としても成立しています。これは新しい学会で、おもしろいので私も時々インターネットで見ますが、この明舞団地で本格的にシニアの意識調査をしてみたいと思っていますので、その時にはご協力をお願いしたいと思います。

入江さんには、ボランティア募集で随分たくさんの方々が参加していただいているようですが、そのあたりのことをお話し願います。

これならできるというボランティア登録を (入江一恵氏)

NPO が共同でやりましたアンケート調査の回答でも、電球を付けてほしい、電気器具のちょっとした故障を見てほしいということが出てきています。こういう場合に業者さんに来てもらうと、電球を換えるだけで1,500円ぐらいかかるというようなことも随分問題になっています。そうしたちょっとしたことの相談窓口を小さい地域の中に一つずつつくっていく。そして、先ほど潜在ボランティアと申しましたが、庭の枝打ちはできるとか、電気の取り付けぐらいならできるとかというようなボランティアを登録する、あるいは聞き取り調査をする。需要と供給の問題なのですが、広域ではそういうことはなかなか機能しませんので、そういう仕掛けを小さい範囲でつくる。そういうことがこの明舞団地の中のどこかの地域でできれば、おひとり暮らしで非常に困っている人も、ちょっと電話をかけるということで用が足せるのではないかと思います。

いつも買い物してもらってお世話になっているからと、お礼と一緒に食事をしましょうということで、私たちにお弁当を特別注文される方がおられます。その時は、鯛の塩焼きなども入れたりして特別にご馳走をつくるのですが、お二人でそれをつつきながらまたお話しすると、それがお世話になっている方へのお礼なのです。そうしたことが、たとえば地域通貨という形になっていけば、もっと気を使わずにやれるのではないかと考えたりします。小さなことでも一つ進めることは難しいかもしれませんが、どこから風穴を開けていくということも必要かと思えます。

会場からも、ご意見をいただきたいと思います。私はこう考えているということがあればお願いします。

趣味の会を通して男性を引っ張り出す (会場発言)

自治会というと、女性の方が中心で出てこられます。何とか男性の方も出ていただきたいと、3年前にゴルフクラブをしようではないかと呼び掛けました。300戸ほどなので、6~7人集まればいいかなと思っていましたところ20数人集まり、現在は40人になっています。40人で年に3~4回のコンペをして、総会をして懇親会をやるのです。随分仲良くなりました。コミュニティが充分はかられて、去年は地域にある公園の掃除をしようということで、公園の掃除もしました。親父を引っ張り出すということでは、何もゴルフでなくても、趣味の会を通して集まるというのも一つの方法ではないかと思えます。

自治会がそれぞれに力をつけないといけない (会場発言)

お話を聞いていますと、それぞれ悩みの多いパネリストさんだろうと思います。昨年春ごろに、連続で自治会の問題をやりました。マンション的な団地、戸建の団地、賃貸住宅の団地、幅広い団地といろいろあって、自治会の運営が非常に難しい。管理組合のあるところは自治会との関係が非常に難しいと。

この活性化という問題は、私が昭和58年頃に明舞センターの活性化という問題を提起しました。商店街の方はご存知だと思います。この団地は、行政区域が神戸市と明石市とにまたがっています。それで

戸建の団地もあるということで、一番の母体である自治会がどう運営するかという問題なのです。グループ活動が自治会の母体ではありません。高齢化が進んで 2~3 割の高齢化になってくると、その人たちをどう見ていくか。会費を取って、その人たちの福祉にどう役立つのかと。基本的には会費を還元しなければいけません。今後の自治会運営で、連合協議会や推進協議会があっても、行政は入って来られないと思いますので、それぞれの自治会がどうしていくかという問題があると思うのです。2~300 円の会費で、自治会をやっていけません。行政に期待しても、財政負担が大きいから補助金も何もかも全部切り捨てになっていきます。ですから自治会がそれぞれ自力でやっていかなければいけないということです。

最後に一番根本的な話が出てきました。それに正面からぶつかることも非常に大事ですが、先ほど小島さんが言われたように、何か楽しいことからやっていくというやり方もあると思うのです。マンションの管理組合と一緒に、自治会役員が 1~2 年交代でやっていく限りは、なかなか力やノウハウの蓄積が難しいところもあります。自治会費の話も、私は遠い但馬などのまちづくりもやっていますが、そういうところは月 2 千円ぐらいの会費を払っています。それでも、地域運営のためのお金が足りないという状況なのです。やはり都市部というのは、行政がいろいろ助けてくれているから住民はあまり負担しないでも何とか地域運営ができていくところがあります。いきなり自治会費を上げてまちづくりができるかというのも難しいところだと思いますので、やはり具体的に取掛かれることからやっていくということが大事です。シニアの話も、やはり楽しくないとなかなか出てこられない。いろいろなことやるにしても、たとえば後で必ず飲み会があるとか、月に 1 回は懇親会があるとか、何かそういうことをセットしていかなくてはという気もします。最後にコメンテーターの小森先生に、感想なり、ご意見をお願いします。

街開き 40 周年のお祝いを住民の手で (小森星児氏:ひょうごボランティアプラザ所長)



今日はいろいろ興味深いお話を聞かせていただきました。先ほどから、シニアのお話が出ていますが、「定年後の 10 万時間里山暮らし」という最近話題になった本があります。10 万時間とは何かと言うと、定年になるまでほぼ 10 万時間を会社のために働く。それでは定年後の時間、睡眠や食事の時間を除いた自由時間が、今の平均余命で言うとやはり 10 万時間だと。会社で働いた同じ時間ぐらひは、定年後に自由に使える時間が残っているのではないかとということです。それをどう使うかは、もちろん何にもしないで暮らすというのがありますが、それだけでは心が休まらないということで、様々な社会活動や自分が満足するような創造的な活動に従事することが、特にこれから定年を迎える団塊の世代の方々の望みではないかと思ひます。そういう方々のために、大きく言えば、生きがいづくりや居場所さがしが大事になってきます。それをコミュニティが提供できるかどうかということが問題なのです。先ほど天気がいいものですから、自分だったらここで何をしたいかなとこの周りを見て歩きました。私は一度炭焼きをしたいと思ひているのですが、ここでは随分と候補地があります。雨水を溜めて、焼いた炭で浄化して飲んでもらったかどうかと思ひわけです。あるいは家具づくり。これは電動機具を使うので家の中ではできませんので、公園の片隅にそういう作業所でもあればいいと思ひます。あるいはペンキ塗りとか、集会所が和式トイレで腰や足の悪いお年寄りにとっては大変具合が悪いので、そういう腕を利用して改修できないだろうかとか、いろいろアイデアが浮かびます。そういうことを一つずつ実践する。しかしそういうことは個人ではなかなか難しいので、たとえばここで活動している NPO にそういうことをやってもらえないだろうか、ペンキ塗りに申し込みがあれば自分が喜んで行くから、お客を集めてほしいということができないだろうかと思ひます。あるいは、年寄りだけ集めてのゴルフも魚釣りもいいのですが、たとえば子どもたちと交流して、特に女性

の場合は昔からの伝統的な遊びや手芸を教えるということも大事になってくるのではないかと思います。

それはともかくとして、この丸 2 年余りの間に、明舞の取り組みが随分と変わってきました。最初に住宅審議会で、兵庫県のオールドニュータウン、明舞と芦屋浜と緑が丘の 3 つの団地が非常に古くなり高齢化も進んできているというお話があり、それぞれにどういう問題があり、その課題にどう取り組めばいいのかという調査が始まったのが 2 年前だったと思います。その時はどこから手をつけていいか分からなかったのですが、この間に随分変わってきました。昨年度には、明舞センターの建替えのための委員会ができ、県下 5 ヶ所で行ったまちづくりフォーラムの一つをこの明舞で開催しました。ちょうど 1 年前には、まちづくりプラットフォームを明舞で開くということについて、神戸まちづくり研究所に対してひょうごボランティアプラザの行政・NPO の協働事業助成が決まりました。また、この明舞団地の再生計画委員会が発足し、ここではまちづくり推進協議会もスタートしました。去年の夏には、今日もご参加いただいておりますが、空き店舗の活用ということで NPO の方々に呼び掛けて、結局 3 つの店舗を提供して地域で活動を開始していただいております。更に、先ほど紹介しました行政・NPO 協働助成で、その内の 2 団体に対して、新しい協働のスキームを提案してほしいということをお願いして今日に至っているところです。またひょうごボランティアプラザの NPO 応援貸付制度に、ひまわりの方に申請していただきサポートさせていただいております。こういうふうに見ていますと、この 1 年の間に、こういうことが実現できないかと思ったことに、ほぼ手をつけて始まっています。これは大変ありがたいことだと思っています。ただ、肝心の建替えと言いますか、高齢化・老朽化が始まっている団地をどうするのかということについては、残念ながらもまだはっきりとした展望はできていませんが、基礎は整ったと思っています。特に団地にお住まいの方々の間で、今まで見えてこなかった新しい動きが始まったことを、大変楽しみにしているところです。

県から紹介されました明舞団地再生計画ですが、明後日に今年度の最後の委員会があります。その場で 4 月以降にどういう施策を展開していけばいいかということも議論し、ある程度明らかにされるはずですが、それを先取りして、皆さん方をお願いしなければならないのは、街開き 40 周年のお祝いを何とか皆さんの力を借りてやっていきたいということです。こういう時代ですから、企業関係者から寄付を集めて、行政からも補助金を貰って盛大にやるということはなかなか難しいのですが、40 周年というきりのいい時に、この団地に来られた第一世代の方がまだまだお元気なこの時に、古い写真といったものも集めて明舞の記録を残していく。あるいはこれからのあり方について次の世代、次の次の世代に引き継いでいくということもぜひ実現できればと思っています。先ほど、千里の街角広場のお話がありましたが、良いことはうちでも真似しようということで、街角広場の創設ということも当然始まるだろうと思います。たくさんの方々が集まり、高齢者に対する施策をもっと急がなければならないというようなお話が展開することを期待したいと思います。

高齢社会はまさに待ったなしです。これまで日本の社会、日本の経済のために貢献してこられた高齢者の方々に、ゆったりとした安心した老後を送っていただくためにも、まだまだコミュニティケアとかたくさん残っていますが、この 1 年の間にこれだけ進んだのです。もう一步、次の 1 年で更に、地域住民によるまちづくり、地域住民による安心・安全のネットワークづくりが大事になってくるのではないかと考えています。はっきり言えば、2 年前のよそよそしいと言いますか、行政に声をかけても、そこはうちの管轄ではないからというようなお話があった頃に比べると随分変わってきた、普通のまちになってきたという気がします。今までは、兵庫県にとか神戸市にとか、いつも行政の話が出てきていましたが、ワークショップや今日の話では、自分たちがやらなければいけないというお声を皆さんから伺うことができるようになってきました。非常に大きな変化で、希望が持てるのではないかと考えています。来年またお招きいただけるようであれば、更に次の 1 年の変化を、ぜひその席上で聞かせていただきたいと思っています。

■ それではこれでパネルディスカッションは終わりにしたいと思います。どうもありがとうございました。

兵庫県県土整備部まちづくり局住宅宅地課

〒650-8567 神戸市中央区下山手通5丁目10-1

TEL : 078-341-7711 (内線) 4844 FAX : 078-362-9458